

長野県
上田高等学校

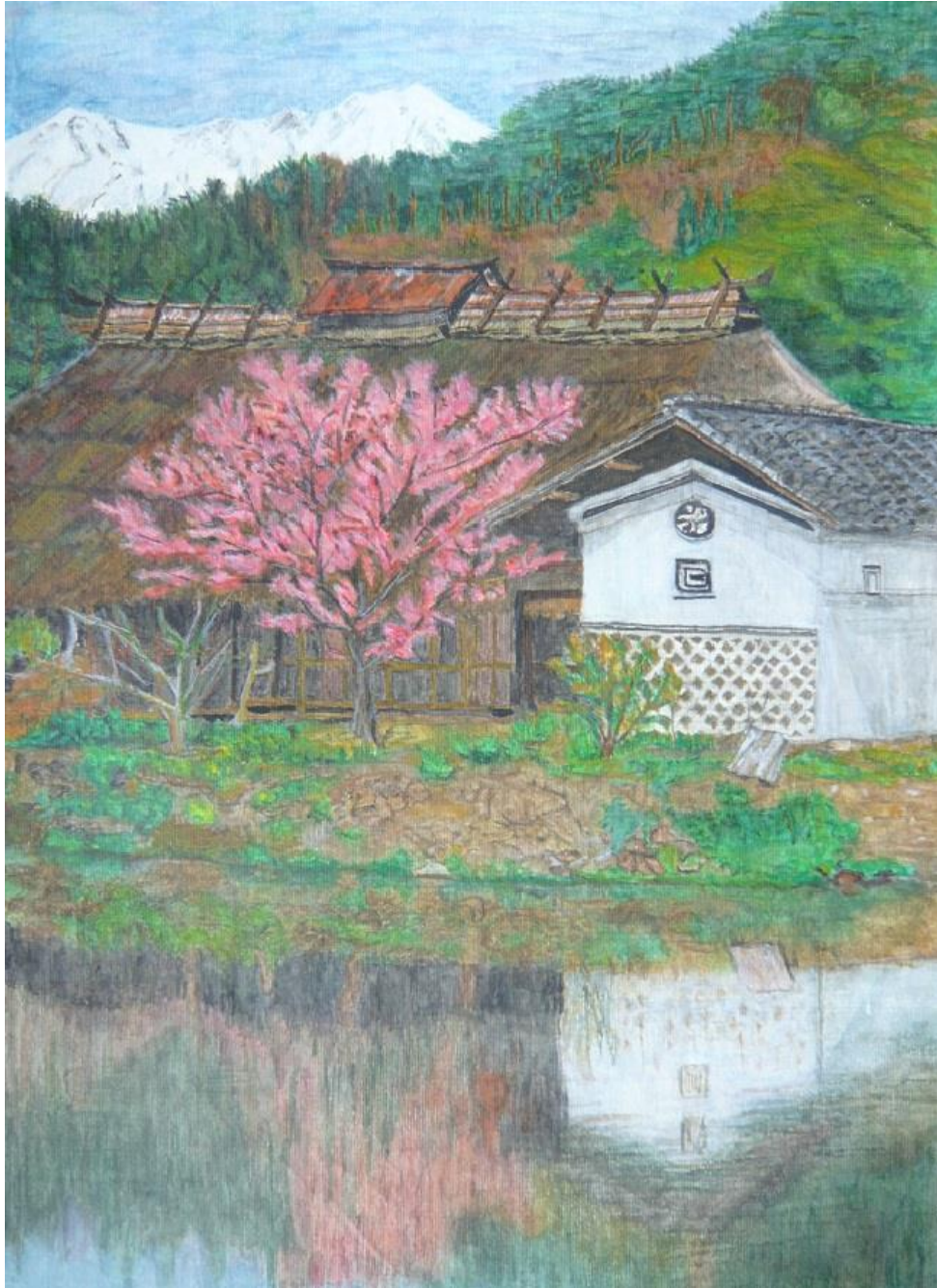
上田高等学校北海道同窓会

会報 第8号

2019年(令和元年)5月11日

編集
発行

上田高等学校北海道同窓会



『信州茅葺屋根の思い出』

信州の実家の数軒下に「茅葺の住宅」が在り、雪が積もった茅葺屋根に朝日があたると雪が融けて湯気が立ち昇り、何とも言えない温かみが立ち込めた田舎の風景を思い出します。養蚕が盛んな頃の茅葺住宅で今も現存しており、春には杏子の花が咲いて色を添える田舎の風景を描いてみました。(63期 沓掛高夫さん)

◆平成最後の観楓会

64 期 福田安矩さん

2018 年度の観楓会が、11 月 15 日に恒例のイタリアンレストラン『ダイニングイル・ネージュ』で開催されました。

平成最後となる今回は、菅沼さん(48 期)が体調不良で欠席で会員 13 名の参加でした。開宴前の余談話で平尾さんより、案内状が見当たらないためレストランに確認した所、「6 時半ですが皆さん早めに来ていますよ！」との事。それに反応して大谷さんより「年を取ると時間が早くなる」……(出来ることなら)年は取りたくないですね。

さて、恒例の一人 3 分間スピーチ。まず、最初に指名されたのは足寄町から参加の吉川さん。吉川さん(81 期)は皆さんご存知の「ありがとう牧場」を経営しており、放牧牛から搾られた牛乳とその最高の牛乳から造られた山のチーズを手土産に参加頂きました。大好評でした。次は司会の大谷さん(65 期)、高校時代から縁のある応援団に因んだ応援団歌 ～北大正気の歌～ の作詞、作曲に至る経緯と、その歌を美声?で披露していました。中国の尺八と言われているトウショウを持参していたので、その演奏も期待したのは私だけでしょうか。次に北澤さんが指名されました。北澤さん(73 期)は、同窓会の幹事をした時は大分若かったが、時の経過と共に年配になってしまったので、若い同窓生の参加を望むとのことでした。沓掛さん(63 期)は、今年はスイカを 30 株植えたが実が付かなかったので、来年は 60 株作付して必ず上手く実を付けるようにするとの決意表明をしていました。また、広い畑を持っているので皆様も野菜造りに参加してほしいとの要望がありました!! 参加者募集。杉山さん(66 期)は今年の北海道胆振地方中東部地震を教訓に、地震保険の申請に最低必要な 3 要素について伝授されていました。例えば茶碗が割れました、冷蔵庫の一部が壊れました、棚が倒れた、この 3 要素で大丈夫……参考になります。スポーツマンの中村さん(65 期)は、マラソンを完走した時の達成感は何事にも優るとのお話。51 期の中曽根さん、平尾さんは、1903 年 7 月に信濃毎日新聞に掲載された、内村鑑三「余の見たる信州人」の解釈、解説をして戴きましたが、頭の回転の悪い私には理解不能の点が多々ありました。また、善光寺の特異性も話題にのぼりました。清澤さん(64 期)は、出身の青木村についての地政学的な特徴、上田市と合併しなかった(本人は合併できなかったとは言っていますが?)理由などで自身の理論展開を行っていました。矢嶋さん(59 期)は、ヒューストンに 3 年間留学した当時の思い出話を語り、トランプ大統領の「アメリカファースト」は当時から変わっていないと強調されていました。メキシコに近いヒューストンからメキシコへの出国は素通りだが、メキシコからアメリカへの入国は検査が厳しかったとのこと。矢島さん(67 期)は北海道(北大に入学)に来てからずっと森林の復興、それも室内のデスクワークとは縁遠い、道内を飛び回っての森林の研究に携わってきたことを感慨深く話されていました。西澤さん(68 期)は岩見沢市からバイオリン(ストラディバリウス?)持参での参加でした。多芸を感じさせますね。医学部を卒業してから今、北海道に居るのは奥様の影響で、もし、奥様の出身地が北海道でなかったら北海道に来ることはなかった!と強調されていました。最後は大谷さんの音頭で、校歌を 3 番まで歌って散会となりました。皆さん、来年も揮って観楓会に参加しましょう。

追記: 大先輩の菅沼英二さん(48 期)が、平成 31 年 3 月 24 日に逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(合掌)



【2018 観楓会参加者(左から:敬称略)】

杉山(66期)沓掛(63期)中村(65期)中曽根(51期)平尾(51期)清澤(64期)
 福田(64期)矢嶋(59期)大谷(65期)北澤(73期)矢島(67期)吉川(81期)西澤(68期)

◆皆さんこんにちは！！同窓生からの近況報告

「歩くこと」

64期 清澤通俊さん



2017年3月下旬から4月中旬にかけて四国八十八ヶ所を巡る旅に出ました。全行程1,200kmを歩き通す体力も気力も初めから無かったことから、歩きながら適当にバス・電車等を使い継いでいく旅でしたが、それでも一日平均15kmほど歩いた勘定です。概してお寺は修行目的や津波を避けるためか、あるいは権威主義かもしれませんが山の上にあるものが多く、きつい上りや下りもあり、札幌に帰ってからしばらくは足をはじめ体中に疲労感が残りました。それと共に、3週間も歩くペースの生活にひたると元のペース、多分それは車を中心とした今ではごく当たり前の生活ペースと言っても良いと思いますが、そのペースに戻ると物を見る感覚にも何かをする動きにも大いなる違和感を覚えました。もう少しのんびり考えて動いたらといった声が聞こえてきそうで、すっかり生活のペースが狂ってしまったのです。

歩くペースで物を見て、考えていくと、歩いてこそ見えるもの、理解できるものがあるような気がします。その一

つは当然ながら対象系をしっかりと理解できるということです。四国には北国と趣を異にする豊かな自然があります。黒潮に育まれた常緑広葉樹や数百年の時を刻む杉やクスノキの大木、人々の生活を支え潤す清流と海原もわが庭のように目の前にあります。しかし、その裏返しとも言えるべき“地方の疲弊と格差”もまた歩いていると見えてくるものでした。これは何も四国に特有なものではなく北海道でも同様に起こっている事象なのかもしれませんが、私たちは普段、車で移動するとそれがよく見えてきません。つまり、点から点へと車で移動し、点からだけ眺めても、おそらくその点は比較的繁華で便利なところでしょうから見えてこないのだと思います。しかし、面をゆっくり歩いていくと、否が応でも車窓からは見えない廃屋とか放棄された田畑とか苔むし荒んだ道が目に見えて飛び込んできます。そこには寂れて、取り残された現実があります。私たちの今の感覚では鉄道駅舎周辺には当然コンビニや商店があると思い込んでいますが、何も無い処が実に多いのに驚きます。豊かな自然に囲まれていると言えば結構なことに聞こえますが、内実は中央から置き去りにされた厳しい生活環境のようです。愛媛県に入って、松山からバスで石鎚山系の懐にある45番札所岩屋寺に向かった時のことでした。予定していた乗り継ぎのバスが土日運行になってしまい繋がらず途方に暮れたその時にバスの営業所で相談に乗ってくれたおじさんは、「時刻表が変わるたびに便数が減っていき、自分たちの職場が縮小していく」と嘆いていたのを思い出します。

しかし、そうした厳しい条件の中でも人々の生活が息づいているのが分かりなぜかホッとします。四国の山あいや海沿いを歩いたとき、また、道を間違えて“エイ、ままよ”とそのまま前進していったときにも、こんな処にもと驚くほどに人々の暮らしがありました。そうした処はまた遍路を受入れ、支えてくれる遍路文化とでもいうべき慣習が色濃く残っているようです。朝の通勤や通学の人々から気持ちの良い挨拶をもらった高知県・窪川町もしかり、また、草生す径がきれいに刈られたりしていると思わず手を合わせて通らせてもらうこともありました。また、道中ではたくさんの“おせったい”を受けました。以前ほどではないと言われますが、おにぎりを持たせてくれた旅館の女将さん、バスを待っていると小分けした飴の袋をくれたお婆さん、うどんの代金を受け取らなかった製麺所の方、77番札所道隆寺の前では引籠りの息子さんが作ったお地蔵さんの焼物までいただきました。“世の中一事が万事力ネ次第”あるいは“便利さの飽くなき追求”といった風潮が強い中で、ここに生きる人々はそれらとは違った尺度で対応してくれている。それが解った「歩き」でもありました。

平坦な4kmの道を歩くとなると私のゆっくりした脚では1時間掛かります。しかし、車では難なく4分ほどで着いてしまいます。今回、歩いていて車という文明の利器のすごさを実感しました。コンクリートの道では尚更です。汗を流しながら、ある時は雨に濡れながら歩くその脇を車はスーと行ってしまう。見る見るうちに遠ざかる車を追って、思わず乗せてって！と叫びたくなる気持ちと、いやいや人間は歩くことが基本と強がりと言う気持ちが交差しまし

た。今更のように車社会にどっぷり浸かっていることを自覚した次第です。と同時に、「ゾウの時間 ネズミの時間」というかつて読んだ本を思い出しながら「歩く」ことについて考えをめぐらせました。

理学博士の本川達雄が著したこの本は要約すると、「時間は体重の1/4乗に比例する。大きな動物ほど何をするにも時間が掛かるし、寿命はすべてこの1/4乗則に従う。動物が変われば時間も変わるのである。時間が違うということは世界観が全く異なるということであり、私たちの常識の多くは、ヒトという動物がたまたまこんなサイズだったから、そうなっているのである。……しかし、寿命を心臓の鼓動時間で割ってみると、哺乳類ではどの動物も一生の間に心臓は20億回打つことが分かる。つまり、心臓の拍動を時計として考えるならば、ゾウもネズ



ミもまた人間も同じ長さだけ生きて死ぬことになり、一生を生き切った感覚は変わらない」という主旨のものでした。しかし、人間はエネルギーをより効率化し、大量に消費することによりネズミの時間を獲得してしまったのではないかと思います。生理的な寿命は変わらないのに行動したり思考したりする時間をスピードアップし、一生のうちにやることも考えることもやたらと多くなりました。その流れは現代において加速し、そして情報過多にもなったような気がします。いや、寿命さえも科学の力で伸ばしており、それらは際限がないように思えます。体のサイズは昔とそう変わらないのに行動や思考のサイズばかり急激に大きくしてしまったのです。そしてこれまで見えていたものが見えなくなったり、考えられたことが忘れられて見過ごされるようになってきました。その結果、ヒトは“生きた”という実感がだんだん薄れてきて、生かされているのではないかとさえ思えます。われわれのやっていることはヒト本来のサイズに見合わず、無理を重ねているのではないのでしょうか。

また、利便性を追求した結果、便利になって失ったものも多いと思います。脚力の低下は言うに及ばず、PC や携帯の使用は漢字の読み書きの力を衰えさせ、結論を急ぎ、待つことが出来なくなり、キレ易くなりました。極端な例では人との接触も煩わしくなったようです。このままでは人間は自らの能力、感性を使い磨くことを忘れ、退化の道を歩んでいるのではないかと思います。

今、車を捨てて歩きなさいと言うつもりはありません。携帯電話、宅配便、コンビニ、ネット通販、これら便利社会を支えているシステムは現代人の生活に深く関わって簡単に解きほぐすことはできそうもありません。人口が減少する社会ではどこかで効率化を図らなければ社会が成り立たなくなるだろうことも解ります。しかし、6 割を超える人が便利過ぎる世の中だと思える社会は行き過ぎた社会だと思わざるを得ません。目の前の便利さに安易に乗ることは止め、余計な便利さを敬遠する勇気が必要です。時として不便さは手間と時間は掛かりますが、人間本来の機能を磨き豊かにしてくれると思います。

そんな答えの見えないことを自問自答しながら歩くペースでいろいろ考え、感じながら3週間を過ごしました。歩くことは言うまでもなく健康維持にも大事なことです。歩いていると自分の身体の調子を測ることができることに気付きます。体の中から自然と自覚症状が湧いてきて自分の心身の健康度を確認できたのも歩いてこそその賜だと思っています。しかし、こんなに歩いてもなお肥満を解消する道筋が見えてこないのはどうしてなのか。どうやらその解決には、また違った思考と行動と決意が必要なようです。

「感謝の気持ちで人生を楽しむ」

64 期 福田安矩さん

私の生まれ育った地は長野県小県郡塩田町大字新町です(現在は上田市と合併しているため上田市新町)。その塩田の地で5人兄弟の四男としてこの世に生を受けました。

大学(立命館)には昭和43年4月に入学、昭和47年3月に卒業して社会人に……当時は高度成長時代だったので、ゼネコンの景気も良くて就職での悩みは無く、将来自立することを考えて中小ゼネコンのクボタ建設(クボタの系列会社)に入社しました。入社してみると面接時の約束は反故にされて、配属先は建設現場ではなく最初からコンサルタント会社に出向となり、水道事業の認可設計、実施設計に携わっていた折に、北海道事務所への助勤の話があり、そのまま北海道に居続けて北海道での生活が45年と人生の半分以上になり、完全な道産

子となっております。

自分の人生を振り返ってみると、誰にでもしみじみと心に感じるものがあると思いますが、過去の経験を生かして今後の人生を生き生きとしたものになりたいと思うのは私だけではないと思います。そのため、自分史を少々考えてみることによって生き生きとした人生の糧に出来ればと願っています。中学生時代までの思い出としては、幼年期は殆ど記憶にないことから、小学生から中学生時代を思い起こすと、小学校では児童委員なんかもやっては



いましたが“悪がき”であることには違いがなく、崖をよじ登って岩松(岩ヒバ)を命懸けで取ったり、時々ではあるがマツタケを松茸山から無断で頂いたりしていました。中学生になっても“悪がき”は変わらず、養殖池の鯉を黙って吊り上げる(これを世間では泥棒と言う)醍醐味などを味わっていましたが、この一件で友達が補導されそうになり、そのために芋ずる式に悪事がばれて私も校長に呼び出されて説教された苦い経験があります。これが中学2年生で、この時悪友は持つべきでないと深く反省し、今後“悪がき”から脱皮しようと心に誓った記憶があります。また、小学4年生から中学2年生までの5年間、新聞少年をして表彰されたことは子供心に自信となり、その後の私の人生に少なからず影響を及ぼしていると思います。

高校生から大学生時代で、記憶の中で忘れられないことは上田高校に初めて羽球部(バドミントン部)を創設して県大会に出場したことで、初代部長として予算獲得、練習の予定表作成などに奔走しました(県大会では残念ながら長野商業と対戦して1回戦敗退)。しかし、周りは勉学に励んでいる友達が多く私だけがサボっていて取り残されている感じを持っていた事も事実で、それが原因?で浪人生活を2年も過ごす羽目になってしまいました。大学に入ってから、前述の如く勉学には殆ど無縁で毎日がアルバイトの連続でした。単位取得不足で2回生の期末には、学生課から呼び出される始末でしたが、何とか追試もなく卒業できたのは担当教授と土木科の友達のお蔭と今でも感謝している次第です。

その後、社会人(サラリーマン)時代では楽しいことも沢山ありました。暇を見つけては友達とテニスをしたり、夏休みには子供たちとキャンプに行き海に潜って雲丹を取って食べたりと(当時の漁師は浜辺で食べる分には認めてくれた)、色々楽しい思い出が蘇ってきます。その他、建設コンサルタント協会が行った東南アジア5か国の研修旅行に参加したことや、インドネシアのジャカルタに海外勤務した事も大きな思い出の一つです。ただ、仕事上は「石の上にも3年」とよく言われるように、社会人として特に忍耐を求められる事が多いと感じました。入社当初は顧客、先輩に対する接し方に苦慮し、年を重ねるうちに後輩も増えてきて技術力、指導力が必要となり、定年が近くなると退職後の自分の将来に対する漠然とした不安感を募らせる毎日でした。不安感を払拭する目的ではありませんが、自分の存在を意識してからは色々考える事が好きになり、例えば「善とは何か?」「自我とは?」などの回答を自分なりに求めてきましたが、未だに納得できる回答になっていない状態です。これらを解決するためには時間が幾ら有っても足りない位で、一生の課題にも成ろうかと思っています。

今まで簡単に自分史を振り返ってみましたが、今の自分は現在もサラリーマンを続行中で、まもなく古稀を過ぎて2年になろうとしています。今後は体力の続く限り、また環境の許す限り生涯一技術者として現役を続ける覚悟で、最後はピンコロ人生にしたいと願っています。しかしながら、生き生きとした人生、充実した人生を送るためには仕事の他に志とか生きる目的を見出していく必要が有るかと思います。表題の「感謝の気持ちで人生を楽しく」生きるための身近なものとしては、趣味の囲碁、将棋、旅行なども、若い頃とは一味違った楽しみ方があると思っています。例えば囲碁、これも相手が有っての楽しみであるから、勝とう勝とうとの気持ちを捨てて相手に対する感謝の気持ちを持って対局する。旅行も然りで関係者、自然に対して感謝の気持ちがないと楽しい思い出と

はならない。これは、仲間内のお付き合いにしても全く同じことで、皆さんへの感謝の気持ちがあればこそ、お酒の味も旅行の醍醐味も一味も二味も違ったものになるに違いないと思います。

中国の古書『呻吟語』のなかの言葉「年老いたからと言って嘆く必要はない、嘆くべきは年老いて目的もなく生きていることである」を胸に刻んで、これからの人生を全うしたいものだと思っています。

「あてどもない夢」

67 期 矢島 崇さん



何にでも手を出す多趣味なのか、それとも趣味というほどの何かを持たないのか、自分ではよくわかりません。それでも中年を過ぎてから、趣味は釣りです、と応じるようになった気がします。海の釣りも多少やったのですが、私の趣味は溪流・湖の釣りです。

釣りの対象となる溪流魚としては、ヤマメが圧倒的に人気です。食べて味が良いし、姿が美しく、俊敏なために釣ったときのヒキが良い。釣り師なら誰もがヤマメ釣りに惹かれます。私ももちろんヤマメ釣りに通いましたが、次第に年を経るにつけ、どういうわけかイワナが気になってきました。

ただ何となく、イワナと遊ぼうと決めていくつものシーズンを過ごしてきました。いかにもイワナっぽい山岳溪流を歩きたい。ポイントを釣り拾って時を忘れたい。溪ごとに少しずつ違うイワナの肌合いをそのバリエーションの数だけこの目で確かめてみたい。毎年迎えるシーズンはじめに、同じような思いを繰り返しているようだったのです。でもそのところを改めて自分に問い直してみると、いやまて、思い当たるフシがあります。イワナと遊びたい。その思いをかき立てる何かがありました。単なる思い付きではなかったかもしれません。

半世紀も前の学生の頃、夏には北海道の山々を歩き回りました。普通の登山道も歩きましたが、好みは沢登りでした。林道を辿ってまず沢から入り、次第に狭くなる沢を詰めて行き、流れがなくなったら藪こぎして尾根に這い上がる。最後は尾根のハイマツを泳ぐようにかき分けて頂上へ。そんなプリミティブな登山です。整備された登山道はあっても沢からのコースの方が断然楽しい、というケースもたくさんあります。沢は登山ルートなのです。もちろん、ネが軟弱なので、予想外の滝に行く手を阻まれてすごすごと引き返すということもよくあることでした。それはそれで楽しいと思えば良いことです。

今思えば、いろいろと沢を歩いてきました。そして、原始的欲求に任せて、釣りもしました。釣りのことばかり考えている今とは違って、そのころの釣りは沢歩きの途中だけです。翌日は尾根にあがるぞという源流のキャンプ地で、ザックを肩から下ろして筋肉の痺れが解けるのを待ち、準備に入ります。携帯しているのはハリと糸と鉛玉だけです。適当な長さのヤナギの枝を切って釣り竿とし、先つちよに糸を結びます。まれに振り出しの溪流竿を持っているヤツには、おまえ、ブルジョアだな、と羨望とヒガミの言葉をかけておきます。川虫(その呼び方しか知りませんでした)を針先につけて段差のある流れに放り込む。当然のようにイワナが応える。次々と釣れる。エサは何でもよかったし、イワナの目玉でイワナを釣ったヤツもいた。あわせ損なって糸を切られたあと、同じ岩陰からヒレとボディに糸を絡ませたイワナを釣り上げたなんてこともありました。イワナも自分も、北海道の溪流も、ずいぶんウブでしたね。人数分の夕食のおかずが揃うと釣りもおしまい。準備を含めても 10-20 分の束の間の釣りです。

あるとき、日高山脈の某溪流で、そんな釣りをしていました。尺近いのがひょいひょいと出て、快適なテンポで食料調達が進んでいました。そこで別のパーティに遭遇したのです。驚くことに総勢約 20 名を越えていて、東京の某大学(忘れてしまいました)の釣りサークルとのことでした。彼らは詳細な地形図を持ち、2~3 人ずつの小グループに分かれて無線機で連絡を取り合い、すべての本流・支流・枝沢を組織的に順々にシラミつぶしに釣っているのです。しかも、ひとりひとり、重そうな袋にイワナを持っています。重すぎるのか、袋の中から小さめのを選んで捨てている光景もあります。膨大な量です。北海道日高で大爆釣！そんな活動報告が目に見えるようでした。

おいおい。そんなにたくさん、ドーすんの？私は、その光景をタジタジとなって眺めていました。自分は登山途中のキャンプで、夕食に食うための釣りをしていました。釣った魚を殺すことに疑いを持ったことはありませんでした。しかしその団体の行為には大きな戸惑いを覚えたのです。北海道というウブな大地を相手に、あまりにも荒っぽい仕打ちに思えました。そしてまた、そのことに呆然とするうちに、彼らの行為と自分の行為に大きな違いが見いだせなくなり、急に情けなくなりました。それ以上釣りを続ける気も山に登る気もそがれ、その場を離れました。後日同じ川に釣りのために友人が入り、寂しい、と報告してきました。沢からの山登りは続けたのですが、それ以来、何となく釣りをしなくなりました。

そんなことも、もう、ひと昔、ふた昔のことになった頃です。山歩きの回数もめっきり減り、釣りからもずっと遠ざかっていました。そんな私が、ほんのちょっとしたきっかけで釣りの世界に戻ったのです。私を魅了したのはフライ・フィッシングでした。本当のきっかけはどうも記憶に怪しいのですが、ブラッド・ピットの「A River Runs Through It」を観て、何だ？この釣りは？と思ったことと無関係でないのは間違い有りません。

川虫もミズも使わない。フライとは虫のことで、それを模した毛針で魚を誘う。日本にもテンカラという伝統的毛針釣りはありますが、謂わばこれは西洋テンカラとでもいう遊びです。この釣りをつぶさに紹介するのは本稿では無理ですが、ごく簡単にその魅力を言えば以下の如く。

まず、サカナが何を食べているかに注目する。溪流のサカナがミズやイクラを常食しているはずがない。どんな餌で釣れるかではなく、いま食べているはずのもので釣る。そのために季節や溪によって違うサカナの餌を知ることから始めます。水棲昆虫の勉強もします。そしてソレに似た(つморいの)毛針を作る。毛針は市販されてもいますが、自分で作るのが本則です。細かい作業なのでハズキ・ルーペは欠かせないし、近頃は指先が震えるので、一杯飲んでからでないと仕事にならない(汗)。それでもこの作業は、たとえ雪に埋もれた季節であっても、釣り師の妄想をゆさぶってくれます。また、ルアーの釣りでは、ルアー自体の重さで遠心力によって遠投するのですが、フライ・フィッシングでは重さのない毛針ですから、それを目的のポイントにまで運ぶには、独特のシステムと技術(キャスティング)が必要です。これがまた難しくてハマる。竿(ロッド)もリールも毛針作りの道具や材料なども、揃えなければならないモノが多くて費用が掛かるのですが、良い道具を集めることもまた楽しい。

それと、これは決して「でなければならぬ」要素ではないのですが、この釣りをする人たちの間でごく普通に浸透しているのがキャッチ&リリースです。サカナを釣って、釣ったサカナは写真に撮ってから溪に返す。釣り針には普通先端にカエシがあつて一度刺さると抜けにくくなっているのですが、リリースが前提の私たちはパーブレス(カエシのない)針を使います。もちろん、いったん掛かってもすると外れやすい針ですが、私は漁師ではないのでサカナに逃げられても生活には影響しないし、外れるのは自分が下手だから



だと思えばいい。食うためでもなく、ただサカナを虐めるだけかい、という指摘はあるんですが、持ち帰ったサカナを食べる以上に、その瞬間の楽しさに満ちている遊びなんです。溪に立っていなくても、真冬でも、お酒を舐めながら楽しめる遊びなんです。

話を戻します。

フライのロッドを手にし、夢中になって下手な毛針をつくり、怖いほどの勢いでその世界にのめり込んでゆきながら、ふと、かつて源流で出会ったウブなイワナの姿を、徹底した川ざらいのシーンとともに思い出していたようなのです。そのことが、里川でヤマメもイワナもニジマスも、ひととおり遊んでみて、さあ、新しいシーズンが始まるぞというときにいつも、今年のテーマはイワナだな、と私に呟かせてしまったようなのです。

その間、溪も変わりました。どこまでも林道が刻まれています。当時半日以上かけてたどり着いた沢の分岐を、今はりっぱな道路が横切っていたりします。コンクリートの壁も増えました。溪の景色は変わっていないのに、魚の姿が見えないところもあります。隅々にまでヒトの手が入った今、北海道の源流域がどれほどかつての名残りをとどめているのか、是非確かめたいと思うのです。ヤナギの枝ではなくフライ・フィッシングのロッドを持って、再びあの溪を辿りたい。落胆するかもしれない。ホッとする場面があるかもしれない。行ってみたい。その気持ちは疼くばかりですが、残念ながら思い描いていた源流釣行は実現しがたいのです。若くはない釣り師にとって、ヒラけたとはいえやはり源流域は遠いのです。

私が思うに、当地には乱獲癖がおおらかに浸透しています。例えばフキならば小型トラックいっぱい収穫する。タケノコ(チシマザサの新芽)は家族総出で持ちきれないほど集める。キノコは米袋いっぱいしなないと獲った気がしない。根こそぎ、という言葉を知ると、リアルすぎてゾッとします。確かにそれを支えてきた自然がたっぷりあったのでしょう。なんぼでもあるべや。これがごく普通の、自然を十分に知っている人たちの共通の言葉です。しかし、実際に無尽蔵の資源など、この世界のどこにも存在しません。なんぼでもあったべや、と気が付いたとき、人は自分だけの場所を求めて山奥に分け入ります。札幌市の周辺で山菜やキノコ採りを楽しむのは大変で、収穫には相当な経験と知識とタイミングが必要です。自然の宝庫北海道も、ずいぶんスレたものです。自分が獲らなくても、誰かが獲る。乱獲文化の原点はここにありますが。釣りも同じです。多くの川は、寂しい限りです。

釣りに関して北海道にはほとんどルールというものがありません。これが乱獲を加速させます。サケの孵化放流を除けば、溪流魚の資源を維持する事業を行っている内水面漁協が殆どなく、そのために溪流釣りに本州のような遊漁料は発生しません。釣りはタダだし、サカナはなんぼでもある。釣れないとしたらそれは誰かが先に釣ったためだ。オレが釣らなくても誰かが釣る。というわけです。

そうした釣りの中で、イワナは時として外道の扱いです。人はヤマメの多い川に集まるし、両方生息している川では、ヤマメだけを魚籠に入れる人が多い。イワナはリリース(実際見た例で言えば、イワナが釣れたら、ぽいぽいと捨てているだけですが)。そのためか今でも幸いなことに、渡島半島には、河口からイワナが釣れる川があるという情報を得ました。河口といえば道路の近くで、つまり、さほど歩かなくてもイワナに会える。多少誇張気味として割り引いても、原風景にイワナが跳ねる釣り師にとって、こんなありがたいハナシはありません。でも今の世の中、そんな川がありますかね？

実際にそのような川を二つ確認しました。小さい川です。河口に架かる橋から一歩入ると、もはや山岳溪流のおもむきなのです。景観だけではなく、溪はタイムスリップしたかのようにウブな輝きに溢れていました。イワナたちは足下を走り抜け、無防備にフライをくわえてくれます。徹底した乱獲文化の中で、このおおらかさは奇跡です。すぐ近くが海だという点で少しイメージが違いますが、源流域でイワナと遊びたいというテーマにもぴたりです。つい、何年も通ってしまいました。そのたびに、今度はダメかも、と不安になりますが、奇跡は続いてくれました。

ずっと続いて欲しいと、願うばかりです。

そんな溪で遊びながらも、思うのです。ヤナギの枝で釣ったあの源流域をもう一度訪ねなければならない、と。北海道はおおむねスレてしまったけれど、完全にすみずみまでスレきったわけではない。大きな幻滅を味わうことになるかもしれない。希望の煌めきに出会えるに違いないとも思う。残されたウブな部分がもしあるとすれば、今のうちにもう一度、しっかり見ておかなければいけない。自分は、そのために「釣り」に戻ってきたような気がするのです。老境の釣り師には源流の釣りなどもはや願望というのもおこがましく、あてどもない見果てぬ夢とは知りつつも、その思いを捨てることは出来ません。

「朗読本にはまっています」

81 期 吉川友二さん

昨年の2018年の7月、小学五年生の末っ子が函館で開かれた全道陸上競技大会に出場した。妻と光里は大会の前日入りをしたので、私は後から一人で応援に向かった。

地球温暖化ガスを出さないJRで行こうか、旅費の安くなる車で行こうか迷うが、CDの朗読本が聴けるので車で行くことにした。ここ二年ほど車を運転しながら、朗読本を聴くことが楽しみになっている。函館に行く時には、村上春樹氏の『ノルウェーの森』を聴き始めたところだった。

朗読本を聴き始めたきっかけは、村上春樹氏の『ねじ巻き鳥クロニクル』の英訳の朗読CDを、たまたまネットで格安で見つけたからだ。普段使うことのない英語の錆取りにと買ってみた。『ねじ巻き鳥クロニクル』は村上氏の中で一番好きな作品である。そのCDをきっかけにして、すっかり朗読本にはまってしまった。それから村上氏の『世界の終わりとハードボイルドワンダーランド』、『IQ84』と聞き、そして『ノルウェーの森』にたどり着いた所だった。

ちなみに、今はハリーポッター・シリーズを一作目から聴いて、五作目の『Order of the Phoenix』を聴いている。先生だけで五人くらい、生徒も五人くらい、それに巨人から妖精、幽霊まで出てくる。これだけの登場人物の声を使い分ける朗読者の芸にまず感動してしまう。ハリーポッターの朗読本を聴いていて、朗読本は本とはまた別の芸術だと感じる。

朗読本の楽しみは、朗読は黙読よりも時間がかかるので、小説をゆっくりと味わえること。また、自分が読んだときに思い描いていた登場人物像と、朗読者が表現する登場人物が異なるので、新しい気付きがあること。それになんといっても、車の運転中に眠くならないことである。

函館へと高速を走る軽自動車の中で『ノルウェーの森』へと入り込んでいく。函館に着くころにはすっかりと暗くなっていた。

ホテルと大会のある陸上競技場は五稜郭公園からさほど離れていないところにあった。翌朝、ジョギングで五稜郭公園を走るが、大学時代を過ごした北大水産学部の北農寮の場所をすっかり忘れて見つけれなかった。

翌日は光里の応援を終えてお昼にまた一人帰路につく。光里たちは明日出場する仲間の応援のためにもう一



日函館にいる。帰りは急ぐ旅でもないので、下道で帰ることにする。

スマホのグーグルナビが指示する道に少し不安になりながら、すっかり暗くなってしまった道に行く。洞爺湖の黒々とした湖面が現れる。『ノルウェーの森』もいよいよ最終局を迎えている。多くの登場人物の自死があり、聴いていてもつらい。先はまだまだ長いので、高速を使うことにする。支笏湖の手前で右折をして、ホロホロ峠を越える。白老インターから高速を運転中に『ノルウェーの森』を聞き終える。

昨年の六月十八日から二十六日までの十一日間、頸椎症で入院をした。五月のある朝、搾乳の始まるときに袖まくりをしようとしたら、左の袖をまくることが出来ない。手がかじかんでいるのだろうか？帯広の厚生病院で頸椎症と診断される。頸椎から手に行っている神経が頸椎で圧迫されているのだそうだ。

退院をしてから、なんで頸椎症になったのだろうか？原因が分からなければ、また再発をして手術にならないかと不安になった。そんな中で斎藤一人さんの本を読んだ。『「魂の成長」とは、自分の魂は神の愛なんだと気づくこと。それに気づいたら、目の前の人に「自分も、あなたも愛である」ということを、どうやって表現していくかです。』愛として今ここにあることができればそれでよい。頸椎症が再発しようが、しまいが。そう思えるようになった。

恋人の自死の後、主人公は長い放浪の旅に出る。これだけ人の死を深く悼むことができる人はいない。それが『ノルウェーの森』がベストセラーになった理由であろうか？朗読本でなかったら、これだけ深く物語の森の中へと入っていけなかったかもしれない。そしてそれが函館への旅の風景と重なり合っている。つらくて、また聴くことができないでいた『ノルウェーの森』だが、半年以上たった今、もう一度しっかりと聴いてみたいという気持ちになっている。

◆同窓会本部通信

長野県上田高等学校創立 120 周年記念事業に向けて本格始動!

創立 120 周年という節目の年を迎えるに当たり、母校の一層の発展を祈念して記念事業を実施したいとの機運が醸成され、学校からの要望事項をもとに数次にわたり協議を重ねて参りました結果、同窓会、学校、PTAの三者による記念事業実行委員会を組織し、下記のとおり記念事業を実施いたすこととなりました。

現在、同窓会理事会及び創立 120 周年記念事業実行委員会総務委員会で会則、組織、下記の事業内容が議決され、5月25日(土)の定時総会で予算承認の予定です。

- ① 堀のしゅんせつ及び井戸の復旧工事
- ② 同窓会館の学習室・ホール及び校内管理諸室の空調設備設置工事
- ③ 校史「高校第二編」発刊
- ④ 会員データの整備
- ⑤ 記念式典（令和2年10月24日(土)予定の令和2年度会員大会にあわせて実施）
- ⑥ 学内記念行事（木）110周年の時は、OBの演奏者のコンサート）

会員の皆様のご支援、ご協力をよろしくお願い致します。

難関大学にも果敢にチャレンジする生徒が増えた。(校長談)

4月の上田高校同窓会理事会での廣田昌彦校長先生のお話です。「浪人が若干増えたが、東大をはじめとする難関大学に積極的にチャレンジする雰囲気が出てきた。また、日頃の学習にも積極的になり、SGHの成果が表れてきている。」とのこと。進路の詳しい状況については、上田高校ホームページをご覧ください。

SGH報告会

平成 31 年 2 月 9 日(土) 8:40～16:20 上田高校独自の多彩なSGH活動の報告会が上田市文化センターにて行われました。基調講演の後、「現代の教育格差に立ち向かう-高校生による学習支援-」2年「長野県の宿泊施設稼働率を上げるためにできることはあるのか」3年 など各学年の生徒による特色ある報告が行われました。午後はポスターセッションがあり、2年全員が発表するなど密度の濃い発表会でした。

高校軟式野球 県大会 上田 20 年ぶり優勝

班活動でも上田高校生の活躍がありました。第 22 回北信越高校軟式野球県大会最終日は平成 30 年 10 月 19 日、松本市野球場で決勝が行われ、上田高校が 11-1 で岡谷工を下し、春、秋季を通じて 1998 年以来 20 年ぶり 2 度目の優勝を果たしています。

※上田の同窓会本部の事務局長がこの春から 73 期の倉澤克彦さんに替わりました。この本部通信は倉澤事務局長に書いていただきました。

◆お堀の現況(同窓会より)

上田高校北海道同窓会の皆様には、上田高校同窓会諸事業へのお力添えに対し深く、深く感謝申し上げます。

さて、ご存知のことと思いますが上田高校のシンボルのお堀が今、危ない状態です。満々と水をたたえ、ある時代は白鳥が遊弋していたあの古城のお堀は今何処。上田市指定文化財であるお堀は給水ポンプ老朽化のための故障と諸原因による漏水で水が少なく、汚泥の堆積などが進んでいます。現在は、上田高校敷地内の雨水等の雑排水が流れ込むお堀の北側のみ、辛うじて鯉の背びれ位までの水が溜まっている状態です。このことから、夏は異臭が漂い、蚊の発生等がある現状に、訪れる方から文化財保護の在り方に危惧の声が上がっています。再三、上田高校からも同窓会からも、県・市当局に申し入れをしましたが、予算や所有権等の諸般の事情で工事は見込めません。

清冽な往時のお堀を取り戻すべく、上田高等学校創立 120 周年記念事業 資金募集には同窓会員の皆様のご支援、ご協力を切にお願いいたします。

漏水のため干上がったお堀



水位が1メートル以上下がった、お堀北側



撮影日 H31.4.24

お問い合わせ先

〒386-0024 上田市大手1丁目9番8号

上田高等学校同窓会事務局 倉澤克彦 宛

電話 / Fax : (0268) 22 - 3146

E-mail : uhd@ueda.ne.jp

◆編集後記

2019 年は 4 月から 5 月で、元号が平成から令和に変わり、そのお祝いもあり長いところでは 10 連休という職場もあったそうです。この時代(元号)が変わる時期に昭和から平成に変わった時の自分自身、家族、仕事のこと等を改めて思いおこした人も多かったのではないかと思います。私はまだ、前の前の青森の職場で働いておりました。長い連休、同窓生の皆様にはいかがお過ごしだったでしょうか？札幌では桜も咲き、気温も上がり過ごしやすい時期でした。その連休も終わり、令和元年の平日がスタートしております。本同窓会会報も平成から令和にかけて原稿を頂き、令和元年となったこの月(5月)に第8号を完成することが出来ました。これも、皆様の協力の賜物です。ありがとうございました。令和も宜しく願い致します (73 期 北澤多喜雄)。